

何れにしても、この二作品を見てもわかるように、平安時代の仮名文学作品には、いろいろな質の差こそあれ漢文訓読語の影響が、強く見られると言えるようである。

※尚、テキストには、日本古典全書「枕冊子」「大鏡」を使用し、引用箇所、段などをすべてこれによるものである。参考文献(略)

鷗外と中国文学

—「雁」を中心として—

濱田朝子

目次

はじめに

第一章 鷗外の漢学修得過程

第二章 「雁」と中国文学

第一節 「大鉄椎伝」

第二節 「小青伝」

第三節 「金瓶梅」

むすび

語注

参考文献

資料 (1)大鉄椎伝

(2)小青伝

はじめに

鷗外の作品も鷗外に読まれた中国小説も数多く、鷗外と

中国文学の全てについて研究するのはなかなか困難である。それ故ここでは特に「雁」を取りあげ、「雁」に現われる三つの中国小説、即ち「大鉄椎伝」「小青伝」「金瓶梅」について、少し詳しく研究してみようと思う。

第一章 鷗外の漢学修得過程

鷗外に親しまれた個々の中国小説について考察するには、その前提としてまず鷗外の漢学素養の性格が如何なるものであったか、又鷗外の傾倒した中国文学がどのようなものであったかに触れる必要がある。

前田愛氏は東京大学附属図書館の鷗外文庫の中に、鷗外が繙読した中国小説類の大半が所蔵されていることに注目し、それらの調査研究を「鷗外の中国小説趣味」として纏めておられる。その考証によれば、医学生時代を中心とし

て留学以前に鷗外が通説したらしい中国小説は次のようなものである。まず確実なものとしては、

「虞初新志」「水滸伝」「情史類略」「石點頭」「艶史」「剪燈余話」「板橋雜記」「槐西雜志」「燕山外史」

これに可能性の高いものとして

「夷堅志」「西青散記」「女仙外史」「小説粹言」「殘唐五代史演伝」

等が挙げられる。「キタ・セクスアリス」「雁」に見える「金瓶梅」については、氏は鷗外の青鉛筆の書き込みより「通説は帰朝後であつたらう」と推測されている。更に氏は読書された形跡から「鷗外の中国小説趣味は雅文小説に傾いていた」と指摘される。それは夏目漱石が漢詩を好み、陶潜等の影響を深く受けたのに比べて、興味深い傾向である。精読された雅文小説にしろ、通説された白話小説にしろ、一般に本格小説と言われるものでもなく、文学的に質の高いものでもない。この鷗外の中国文学趣味にある大衆性は、何を意味するのだろうか。それは文学者を志すでもない、医学者として、又森家の長男として、確実な将来を保証された青年の一種の遊びとして、読書に求めた「美しい夢」の世界であつたと言えよう。それ故に、若き鷗外の逃避の世界であつたこの「美しい夢」の世界の中には、一般には見落されている文豪鷗外の一つの側面——それは極めて小さな一面であるかも知れないが——を見ることができるのである。又それらの考察によって、鷗外文学の本質を違った角度から解く鍵を見出せるのではなからうか。

うか。即ち第二章ではこのような問題意識を持って、「雁」の中の三つの中国小説について考察を試みたいと思う。

第二章 「雁」と中国文学

「雁」は一羽の雁の運命に絡ませて、明治の初め頃、東京の下町に住んだ或る人々の運命を語つたものである。それは多分に私小説の要素を持つが、事件の後三十年以上もたつて書かれたものであり、その長い歳月に濾過されて、作品は品よく纏まり、芸術的に密度の濃い小説だと言える。

第一節 「大鉄椎伝」

「雁」の物語を進めていく語り手「僕」は、勿論鷗外自身であるが、主人公岡田も亦鷗外の理想とした、鷗外自身の姿として描かれている。その岡田は医科大学の学生で、美男であり、競漕の選手であり、「虞初新志」を愛読する文学青年でもあつた。

岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鉄椎伝は全文を誦誦することが出来る程であつた。それで餘程前から武芸がして見たいと云ふ願望を持ってゐたが、つひ機会が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間へ推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が発展したのであつた。

この「大鉄椎伝」は「虞初新志卷一」の最初にある四頁余りの短い小説である。一応の概略を簡単に述べると、大

鉄椎伝」の主人公は、懷慶の宋將軍の健啖の客であつた。「貌甚寝」で風采は揚らなかつたが、右脇にいつも四五十斤の大鉄椎を挟んでいた。ある夜、彼を仇と狙う百人許の賊を相手に、大鉄椎を振るつて戦い、忽ち三十人許を人馬諸共粉碎し殺してしまふ。宋將軍が息を潜めて之を觀、今にも馬から落ちそうになつた時、客は地塵黒煙を捲いて馳せ去り、再びその姿を現わさなかつた。と言ふ話である。

内容もさして難しいとは言えないし、誦誦するのも容易であるが、しかし鷗外がこの小説に誦誦する程までに引きつけられた理由は何であらう。笹淵友一氏は「森鷗外とシナ近世文学」の中で、

彼はこのように少年鷗外を魅する異常な臂力の持主であつた。と述べておられる。しかし、少年鷗外、と言つてももう二十歳前の青年に近く、知的にも水準の高かつた鷗外だけに、大鉄椎の臂力だけに魅せられるのは単純過ぎはしないだらうか。すると自然、大鉄椎が「貌甚寝」であつた点が注目されるのである。

「キタ・セクスアリス」より鷗外が自らの容貌に関して述べている文を二三挙げて見ると、まず十歳の鷗外は、寄宿舎の中で殖生庄之助という生徒と二人一番若かつた。

殖生は江戸の目医者の子である。色が白い、目がぱっちりしてゐて、唇は朱を點じたやうである。體はしなやかである。僕は色が黒くて、體が武骨で、その上田舎育ちである。

で十五歳の秋

漢學者の友達が出来て、剪燈餘話を読む。燕山外史を読む。かういふ本に書いてある、青年男女の *romantic* な恋愛がひどく羨ましい、妬ましい。そして自分が美男に生れて来なかつた為に、この美しいものが手の届かない理想になつてゐるといふことを感じて、頭の奥には苦痛の絶える隙がない。

二十歳

生んで貰つた親に対して、かう云ふのは、恩義に背くやうではあるが、女が僕の容貌を見て、好だと思ふといふことは、一寸想像しにくい。或は自知の明のあるお多福が僕を見て、あれで我慢をするといふやうなことはないにも限るまい。併し我慢をしてくれるには及ばない。そんな事はこつちから辞退したい。

少年・青年時代を通して鷗外が美男ではない自分を自覚し、どれほど美男美女の恋愛を羨ましく妬ましく思つたかは容易に理解される。実際、若い鷗外の写真を始め見る機会有る人は、鼻が大きくて目の細い彼を見つけて、少しがっかりするだらう。

森於菟は「鷗外と女性」の中で、鷗外がこれ又美男でない息子の於菟に美しい嫁を持たせてやろうと思ふ時、よく「さあ人種改良だ。」と言つたと語つてゐる。そこに感じられるユーモアは鷗外の年齢・経験・地位・容貌を越えた人間性の高さや自信等からくる余裕であらう。そして、その余裕を鷗外自らがはつきり自覚してゐたことは、「半日」

の中にも窺える。

今夫を愛してゐるだらうかと、自ら問うて見る。夫は好い男ではない。いつであつたか、「好い男は年を取ると損ねるから、おれのような醜男子の方が得だ」と、夫の云つたことがある。或時又「おれなんその顔は閱歴が段々に痕を刻み附けた顔で、親に生み附けて貰つた顔とは違ふ」と云つたこともある。

と。實際晩年の鷗外の顔は自信に満ちている。この点鷗外は「人間四十を越えた自分の顔には責任をもつ」という格言を實行した数少ない実践者の一人だと言える。しかし若い鷗外にとって自分が美男でないことは、単に「ひどく羨ましい。妬ましい。」だけでなく、又大きなコンプレックスでもあつたと言えれば言い過ぎだらうか。

「容貌は其持主を何人にも推薦する」という言葉は「雁」の中の一文であるが、鷗外の容貌は鷗外を何人にも推薦しなかつた。そこに「貌甚寝」の英雄の存在意図がある。「貌甚寝」にも抱らずその勝れた武芸のために「一種の神秘のかけを帯びた人物」大鉄椎に強く引かれる鷗外、それで鷗外も「よほど前から武芸をしてみたいという願望」を持ち、競漕を試みたのであるが、岡田が「仲間」に推されて選手になる程の進歩をしたのに比べ、鷗外の腕はあまり上達しなかつたらしい。結局、美男でない鷗外をして何人にも推薦させたのは、鷗外の知性であつた。この現実の自己を認識しては「己を何人にも推薦する」ために、ひたすら学問に精進するその切磋琢磨の時代の一つの応援歌として、「大

鉄椎伝」を一度捉えて見ることはできないだらうか。若い鷗外が一つのコンプレックスを持ちながらも大きく成長していく時に、「全文を諳誦する程」好んだ小説として、その重要性はもつと強調されてもいいと思う。そこには揺ぎない文豪鷗外のなんと人間的な断面を窮い見ることができらう。

第二節 「小青伝」

同じ貞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青伝であつた。あの伝に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を閻の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を凝すとても云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香奩體の詩を読んだり、*Sentimental* な *Fantastic* な明清の所謂才人の文章を読んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐたためもあるだらう。

「大鉄椎伝」と同じく「雁」の中で岡田に読ませているこの「小青伝」は、鷗外の女性観確立の一翼を担つたものとして、鷗外を語る人の多くが引用して来たものである。その概略を述べると、「小青伝」の主人公小青は幼時から慧敏で、諸技に通じ、音楽をよくした。十六歳の時、虎林

の豪公子某生の妾となつたが、嫉妬深い本妻のために孤山に幽閉されてしまう。本妻の親戚の某夫人が憐れんで、小青をその境遇から救い出そうと、彼女の魚心を引いてみるが、小青はそれを自己の運命と観じてあえて動こうとしなかつた。そして幽憤悽惻の情を詩や小詞に托していたが、遂に病氣になり、その病は日々重くなつて、一日に一盞の梨汁を取るだけになつた。それでも「明妝治服」して「蓬首偃臥」しなかつた。死期が近くなつてから良画師を招いてその顔を写生させたが氣に入らず、三度書き換えさせた。三度目にその妖織の致を極めた出来に満足し、やがて息が絶えた、という物語である。

而して「死の天使を閻の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を凝す」小青は、理想の女性の姿として若い鷗外に受け入れられているが、それにしても鷗外は小青を少し美化し過ぎてはいないだろうか。私は「小青伝」自体にこれ程強く鷗外を引きつけた特別の魅力を見出せなかつた。それも裏を返して見れば、鷗外が醜男であつただけに、美しさに人一倍敏感であり、女性の美しさを絶対視したのかもしれない。それ故「美しさを性命にしてゐる女」と言うのは、鷗外の理想の女性の最も大きな要素であつたと言えよう。

第三節 「金瓶梅」

さて岡田は不意な事から、お玉のために蛇を殺してやるのだが、その話を聞いた「僕」がこんなふうに思う所がある。

僕は岡田の話聞いて、単に神話らしいと云つたが、実は今一つすぐに胸に浮んだ事のあるのを隠してゐた。それは金瓶梅を読みさして出た岡田が、金蓮に逢つたのではないかと思つたのである。

因に「金瓶梅」は西門慶という好色一代男を中心にして、明代の社会と人間とを総括的に描いたものであり、金蓮とは西門慶の第五夫人潘金蓮のことである。類い稀な美人であつた金蓮は、平凡な妻としての生活に満足できず、夫の留守に西門慶と通じ、帰つて来た夫を毒殺してしまう。その我欲な性格と情欲の深さはやがて金蓮自身の身を滅ぼす毒婦ではあるが、運命の吉凶禍福に弄ばれた哀れな女と言えよう。

ところでお玉と金蓮との関係について、筑摩全集の「森鷗外全集」の語注を見ると

ここでは末造、岡田の関係を武太郎・西門慶に比し、お玉をば旦那を捨て美男のもとに走る毒婦かとしたもの、と解釈されている。しかしお玉と金蓮との関係について明らかにするには、その前にお玉のモデルについて述べておく必要がある。「キタ・セクスアリス」の十七歳の条を見ると、

休日の前日が来て、小菅の内へ帰る度に通新町を通る。吉原の方へ曲る角の南側は石の玉垣のある小さな社で、北側は古道具屋である。此古道具屋はいつも障子が半分締めてある。其障子の片隅に長方形の紙が貼つてあつて、看板かきの書くやうな字で「秋貞」と書いてある。小菅

へ行く度に、往にも反にも僕は此障子の前を通るのを案
にしてゐた。そして此障子の口に娘が立つてゐると、僕
は一週間の間何となく満足してゐる。娘がゐないと、僕
は一週間の間何となく物足りない感じをしてゐる。此娘
はそれ程稀な美人といふのではないかもしれない。只薄
紅の顔がつやつやと露が垂るやうで、ぱっちりとした目
に形容の出来ない愛敬がある。洗髪を島田に結つてゐて、
赤い物なぞは掛けない。——僕は娘の名前も素性も知ら
ぬまま洋行するまでの五年と言ふ長い間、娘を「美しい
夢」の主人公としていた——僕は例の美しい夢の中で、
若しや此娘は、僕が小菅へ往復する人力車を留めて、話
をし掛けるのを待つてゐるのではあるまいかとさへ思つ
たこともある。併しまさか現の意識でそれを信する程の
詩人にもなれなかつた。餘程年が立つてから、僕は偶然
此娘の正體を聞いた。此娘はぢきあの近所の寺の住職が
為送をしてゐたのであつた。

少し長い引用になつたが、鷗外のこの初恋の女性が、お
玉の原型であることは、多く諸論の一致する所であり、勿
論少し念入りに読んだ人なら誰しも気付くことであらう。
そして鷗外がその最も多感な時代に憧れ続けた「秋貞の娘」
は興味ある存在である。しかしながら鷗外も読者も「秋貞
の娘」について、これ以上のことは何も分からない。そし
て何も分からないが故に霧の中の「秋貞」の娘は自由に鷗
外の中で理想化され、具体化されて、五年もの長い間鷗外
の「美しい夢」の対象と成り得たのであらう。お玉はそん

な「秋貞の娘」を原型として、鷗外の中で煮つまり、鷗外
の好みの衣服を纏つた鷗外の理想の女性である。

お玉の原型については以上の如くであるが、鷗外全集の
語釈に従つて、更に詳しくお玉と金蓮との關係に分析・検
討を加えてみたい。

「金瓶梅」を見ると、武大の妻として一生を送ることに
不満な金蓮は、毎日「簾のそばにたたずみ」往來する男た
ちの中に、理想の男性が現われ、自分を今の境遇から救い
出してくれるのを待ちながら歌つていた。

むかし思えば最初から、結びの神のまぢがいよ。あいつを
亭主にもつなんて。自慢するのじゃないけれど、あんな
からすが鳳凰の亭主になつてなるものか。土に埋れちゃ
いるけれど、黄金とあんな赤金と、ごっちゃにされてな
るものか。あいつはもともとただの石、それがあたしの
やわ肌を、抱くとはなんの当たりくじ。

一方「始めて独立したような心持ちになつた」お玉は、自
分を厚く遇してくれる末造を、有難くも思わなくなつてく
る。

それと同時に又なんの躰をも受けてゐない芸なしの自分
ではあるが、その自分が末造の持ち物になつて果てるのは
惜しいやうに思ふ。とうとう往來を通る学生を見てゐ
て、あの中に若し頼もしい人がゐて、自分を今の境界か
ら救つてくれるやうにはなるまいかとまで考えた。

そして金蓮が首尾よく「水のしたたるような男」西門慶を
射止めるように、「この時お玉と顔をしり合つたのが岡

田であった。このように秋貞の意志を持たない「障子の口の女」は、「金瓶梅」の浮気な「簾のそばの女」を経て、「雁」の中で「窓の女」としてお玉に現われているのである。

ところでお玉の性格はじゃじゃ馬な金蓮であるよりも、寧ろおとなしい小青ののだと言える。しかし、小青は武人平章との「再辱」をきっぱりと付ける女性であった。自らの意志で「配偶者」を捜すという「生」への意欲と行動とを持つ点に於て、お玉はやはり金蓮であるといえよう。これは鷗外の女性観にとつて大切なことである。鷗外が女性の美しさを絶対視していることは前に述べたが、鷗外自身「僕はきれいなおもちゃを買ひに行く気はない」と言っているように、鷗外は意志をもって生きている女性を愛した。しかしそれは近代女性解放問題と言うのとはちょっとニュアンスが違い、鷗外のインテリジェンスの高さが求めた女性の聡明さとも言えよう。従つて岸田美子氏の言葉を借りれば、鷗外の理想とした女性は「美しく聡明で、平常はつましやかであるが、事にのぞめば意気地ある女性」と言うことになろう。そして「平常はつましやか」な小青のお玉も、「事にのぞめば意気地ある」金蓮となれるのである。

しかし岡田は金蓮の誘惑にのる西門慶ではない。彼は半分飲みほして差し出す金蓮の杯を卓子に投げうつ武松に他ならない。たまたま「簾を巻き上げるはずみに西門慶をぶった」ために、不運な宿命に弄ばれて、無念の涙を飲んで

武松に殺された金蓮の如く、岡田の無言の斥けを受けて、お玉の恋も無念の涙を飲んで終る。偶然の運命によつて、意志にそぐわぬ結末を背負う二人の女は、「美しさの性命」のために、自らの選択で運命を選んだ小青よりも、ずっと人間的ではなからうか。それ故「不しあわせな雁もあるものだ。」と云う岡田の独言が、読者に重い余韻を残すのである。

ところで一体西門慶はどこにいるのか。竹盛天雄氏は作品論「雁」の中で

それは潜在的主人公「僕」として、傍観者の遊びの境涯に飼ひ殺しになっている。あの欠臂の少年の隠微な欲望として生きつづけている。

と言われ、更に「これが「雁」の世界を成り立たせる根源的な活力ではあるまいか」と示唆しておられる。自分を岡田の地位に置きたいと云う感情を否定しながら、「僕」の想像は取留もなく広がっていく。

僕は岡田のやうに逃げはしない。僕は逢つて話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢つて話だけはする。そして彼女を妹の如く愛する。彼女の力になつて遣る。彼女を遊泥の中から救拔する。

それこそ現実には岡田でも西門慶でもあり得なかつた鷗外の若い感情の根調にあつた「美しい夢」であつたと言えよう。

しかし、「金瓶梅」をもとにしたこのような見立ての可能性については、今少しその真实性を問わなければならな

いし、竹盛氏の言われる「雁」を成り立たせる根源的な
活力」についても尚一考を要する。

鷗外は「空車」の中で

古語は宝である。しかし什襲してこれを蔵して置くのは、
宝の持ちぐされである。縦ひ尊重して用ゐずに置くにし
ても、用ゐざれば死物である。わたくしは宝を掘り出し
て活かしてこれを用ゐる。わたくしは古語に新なる性命
を与える。古語の帯びてゐる固有の色は、これがために
滅びよう。しかしこれは新なる性命に犠牲を供するので
ある。わたくしはこんな分疏をして、人の諂を顧みない
と書いている。この滅んだものに「新なる性命」を吹きこ
もうとする鷗外の創作態度によつて、「空車」が元来の色
を失つて、鷗外流の新しい意味を得たように、色彩豊かな
「金瓶梅」の世界は、水墨画のような「雁」の中で微かな
色模様を浮べている。そして「雁」という作品は、ちよ
ど何枚もの版木の組み合わせでできた浮世絵のように、明
治という時代の風俗、鷗外自身の経験、若き森林太郎の「美
しい夢」、中国の豊かな白話小説の世界等が輻輳されて
きた逸品と言えよう。

むすび

そこには「忘想」の中の有名な

どんなに巧みに組み立てられた形而上学でも、一篇の抒情
詩に等しいものだといふことを知った。

と言う言葉をあたかも逆にしたように「一篇の抒情詩」と
も言うべき「雁」には、巧みに組み立てられた鷗外の美や

運命の精神を窺い見るようである。

語注

1. 「國文學言語と文藝」三八号・大修館書店・昭40・1
2. 「古典と現代」17・昭43・3
3. 「森鷗外研究」中野重治編・新潮社・昭32
4. 筑摩書房・昭46・10
5. 「キタ・セクスアリス」
6. 「雁」偶感（「解釋と鑑賞」六・昭21・6）、又
「鷗外と女性」森於菟
7. 「森鷗外必携」稻垣達郎編・文栄社・昭43・1

